開園当初からある樹木の緑が美しく、自然と調和した中で過ごせる園舎

自然の素晴らしさを感じ 安心できる環境で園生活

自由遊びをたっぷり

五感使い、学び深める

すみよし愛児園（甲府市）

子どもたちが自分で感じ、やってみたい、見てみたいと思った時にすぐに行動に移せるような時間や空間を大切にしている保育に取り組む、甲府市の社会福祉法人ゆうゆう すみよし愛児園（矢巻行祥統括園長、園児75人）。五感で自然の素晴らしさを感じ、安心して生活できる環境とともに、保護者や地域の人たちとの協働にも力を入れている。

緑あふれる樹木が美しい園庭と、自然と調和した中で心穏やかに過ごせる新しい園舎。すみよし愛児園の子どもたちは、こうした五感で自然の素晴らしさを感じられる環境で園生活を送っている。

平成26年に完成した新しい園舎は、旧園舎と同じ位置に建設。保育室の配置も、旧園舎を踏襲した。そして、開園当初からある園庭の樹木も、基本的にそのまま残した。

卒園生をはじめ、園で過ごした人たちが再び訪れた時、建物は新しくなっても、かつての思いや記憶、景色がよみがえるような園舎を目指した。矢巻園長は「昔を知らない人からも、『懐かしい感じがする』『前からあったみたい』と言ってもらえる」と話す。

園舎には、夏は木漏れ日が差し、冬は明るい光がたっぷり取り込まれる。子どもたちは春夏秋冬の四季を感じながら、自然と調和した、安心感あふれる環境で生活している。

保育で重視していることの一つが、自由遊びの時間をたっぷり取ること。午前は登園後すぐから給食の時間まで、午後は午睡後におやつを食べてから降園までの時間を基本的に自由遊びとしている。

多くの子どもたちは園庭に出て、少しでも面白くなるように工夫を重ねながら、保育者の力も借りて好きな遊びを深めていく。その中で異年齢の子どもが一緒に遊び、年上の子が年下の子の面倒を見たりするなど、互いを認め合いながら育ち合う姿も見られた。

保育者は、子どもたちを観察しながら一緒に遊び、肯定的な声掛けや必要な教材の準備など、感性・表現力・社会性を育てるために求められる最善の関わりを考え続ける。

保護者・地域との協働に力

石窯の活動、災害時の役割も

石窯には、興味を持った子どもたちが集まってくる

すみよし愛児園では「人は人の中でこそ人として育つ」という理念から、保護者や地域の人との協働にも力を入れている。代表する活動の一つが、「石窯を使った活動」だ。

石窯は、タイルを並べて子どもたちがデザインを考え、それが実現できるように左官業をする保護者が中心となって大人たちが協力して設計し、完成させた。

完成後は月に1回、毎月最終火曜日に「石窯を使った活動」を実施している。園児だけでなく、保護者や地域の人たちも参加。子どもたちの五感を育て、保護者や地域と園の協働を深める充実した取り組みとなっている。

8月29日、矢巻園長が石窯で炭火をおこしていると、興味を持った園児たちが集まってくる。「やってみたい」と言うと、園児たちは危険のない範囲で矢巻園長を手伝った。

窯の中の温度が上がると、同一法人が運営する子育て支援センターの利用者や学童保育の小学生、地域の人たちが園を訪れ、野菜やギョーザなどを石窯で焼き、その場で食べた。気付いた園児たちも集まり、一緒に試食したり、小学生と遊んだりしていた。

そのころ、5歳児たちは、おやつとなるピザトースト作りに挑戦。午睡後、それを3歳児・4歳児と共に石窯で焼き、一緒に食べた。子どもたちは感覚を研ぎ澄ませ、おいしそうな匂いがすると「焼けたよ」と矢巻園長に伝えていた。

石窯は、こうした活動を実施するだけでなく、災害時に温かい食べ物を提供する役割も担う。毎月1回活動を行うことは、災害時にも石窯を使うための訓練にもつながっている。

この他、保護者とのふれあい交流会では、炊き出し訓練を兼ねた屋外での食事作りを実施。運動会や夏祭りにもこうした要素を取り入れ、家庭同士のつながりを日頃から感じるようにも工夫している。

矢巻園長は「子どもたちのために、質の高い『すみよし愛児園基準』の環境を、保護者や地域の人たちと一緒につくっていきたい。そのために情報を積極的に公開し、地域に住む全ての人たちが関わり合えることを大切にしたい」と話している。

すみよし愛児園＝☎055・237・4101

関連記事

新制度、基本指針改正案を審議〈1面〉

幼稚園教諭の平均年齢 公私の差縮まる〈2面〉

大豆生田　啓友

玉川大学教授

バンニとカムパネルラだとする説に基づいた特別展示でした。

＝写真＝を開いてみることにしました。この絵本は、布・ビーズ・クリスタ

の幸せのために一緒に歩んでいこうと誓い合うのですが、カムパネルラは消えてしまいます。その後、カムパネルラは自分の命を犠牲にして友達を救ったことを知り、銀河鉄道の旅が意味したもの

眺めるのです。自分が大きな宇宙に包み込まれた小さな存在であることを感じられる、この時間がとても好きです。

日々の生活の中の悩みや葛藤は、小さなものに見えてきます。同時に、

と共に星をゆっくり見る時間があることは、豊かな物語の世界と同時に、希望を生み出すことにつながるのではないでしょうか。

次回は10月2日付掲載

小学校との交流・連携の共通

通常の保育の中では、隣接する市立藻岩南小学校と連携。4歳児と2年生、5歳児と4年生の組み合わせで実施する年間5〜6回の活動を中心に、子どもたち同士が交流を深めている。両学校園の教員は、互いの子どもたちの成長を見ながら話し合い、実態に合わせて活動の内容を決めている。

各園や学校の取り組みに加え、札幌市では、全行政区に幼保小連

「10の姿」を念頭に置いて子どもの「育ち」を議論した地域公開保育のグループ協議

置いて自身の視点で捉えた子どもたちの「育ち」を、生活科の研究会の広報誌に掲載。園職員で保育を振り返った際に、これを参考資料として活用した。

現在、もいわ幼稚園では、「アタッチメント」に着目し、子どもたちに安心感や信頼感を家庭で育めるように保護者が宿題を行うなど「保護者と共に進める研究」に取り組んでいる。その中で、保護者に対して「遊びの中で育っている力」「今、大切にしたい姿」を伝える時にも、「10の姿」を生かしていく。

保護者に対しては、5月末に発行した園便りで「10の姿」を伝えた。同じ紙面に掲載した5歳児の遊び（人形作りから家作りへの発展）の姿から、「協同性」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」などが育ち合っている様子が見られると紹介した。

次回は10月2日付掲載

ニュース BOX

小学生が親子
考える機会に

夏休み親

札幌市立屯田小学校（新保元康校長）で8月19日、同校のPTAと教員が主体となって夏休み親子上映会が開催された。

同上映会は、映画雑誌「キネマ旬報」を刊行するキネマ旬報社の協力のもと、昨年大きな話題になった『この世界の片隅に』（第40回日本アカデミー賞最優秀アニメーション作品賞受賞。2016年・第90回キネマ旬報ベストテン日本映画第1位）を上映。同作は、昭和19年、第二次大戦中に軍港のある広島・

呉に嫁入りし
主人公に、戦
と悪化する中
きに日々の暮
おしみながら
く一人の女性
いている。
上映会には
童とその家族
が参加。子ど
普段触れる機
い「戦時中の
らし」をテー
映画に戸惑い
一方で、教科
知る「戦争」
た何かを感じ
る様子だった

家庭で戦争に
えるきっかけ